2202　離島覚書（沖縄県・渡名喜島）

渡名喜村勢要覧から引用

令和４年４月 15 日

陸繋島

渡名喜島は那覇市の西約 60 ㎞の東シナ海に浮かぶ。同島の約 30 ㎞西に久米島、北へ約 30 ㎞に粟国島があり、この３つの島はトライアングルの関係にある。島の面積は 3.46 ㎞^{2}、周囲は 16.1 ㎞で、２つの島が砂洲で繋がった陸繋島である。この砂洲ができたのは約 3,500 年前といわれている。北部の島は最も高いところが西森の 146m、南部の島には、大岳（165 m）とタモ岳（178m）の２つも峰がある。南北の山に挟まれた平坦な砂洲上に集落が形成されている。

渡名喜島へは那覇市の泊港から久米島商船㈱の「フェリー琉球」が就航しているが、通常は１日１便しかない。したがって、渡名喜島に行くには島に１泊しなければならない。民宿は現在２軒あるが、収容力は少ない。これまでも何回かこの２つの民宿に電話をいれたが、いつも満室だった。そして新型コロナが流行ってからは島に泊まるのがほぼ絶望的になっていた。

ただし、例外的に４月から 10 月までの７ヶ月間は金曜日のみ１日２便就航する。この便を利用すれば日帰りが可能だ。島の滞在時間は 10 時 55 分から 15 時 35 分までの４時間 40 分に限られるが、いたしかたない。４月に入ってから早速、念願の渡名喜島へ行くことになった。

泊港近くのホテルスマイル沖縄那覇に前泊したので、歩いて１分の「とまりん」（泊ふ頭旅客ターミナルビルの愛称、各離島行の切符売り場がある）内にある切符売り場でフェリーの切符を購入、コンビニで朝食用にハムサンドと珈琲を買ってフェリーに乗り込んだ。

フェリーはエンジンが不調とのことで、定刻の９時を 10 分ほど過ぎてから出発した。渡

名喜島までは約２時間を要し、11 時過ぎに渡名喜島に着いた。

渡名喜島は南側を除いて周囲にサンゴ礁が発達している。このため、島の西側のサンゴ礁を掘削して航路が掘られ、立派な漁港が整備された。漁港工事は本土に復帰してまもない 1970 年代前半から進められ、1980 年にフェリー岸壁が完成、島にフェリーが就航したのは 1981 年のことであった。海から見て右手が漁船の船溜まりとなっていた。

フェリー琉球（左）、渡名喜島の港と集落（左）

村役場

「フェリー琉球」は渡名喜島を経由して久米島に向かうが、渡名喜島では 30～40 人が下船した。

フェリーターミナルの道路を隔てた反対側に観光案内所がある。島の特産品がわずかばかり売られていて、休憩もできる。ここで島のパンフレット類を入手する。案内所の女性の話では、フェリーはエンジントラブルで午後便は欠航するかもしれないという。宿を予約していないから、その場合案内所で仮眠させてくれるのかと聞くと、泊まることはできないという。野宿でもしろというのだろうか。

渡名喜村は渡名喜島と入砂島（いりすなじま）で構成されるが、入砂島には現在人は住んでいない。渡名喜島は１島１村で、1908（明治 41）年、沖縄県に町村制が実施されて以来、渡名喜村を貫いてきた。村役場は観光協会の裏手にある。役場を訪ねたが、コロナ禍とあってカウンター内には入れないし、事務所との境はビニールシートが垂れ下がっていた。

2020 年国勢調査時の渡名喜村の人口は５年前より 84 人減って 346 人であった。沖縄県内の 41 市町村の中では最も少ない。また全国でみると、青ヶ島村（177 人）、御蔵島村（317 人）、粟島浦村（342 人）に次いで、下から４番目である（原発事故の影響で人口ゼロの双葉町を除く）。65 歳以上の高齢者の占める割合は 41.3％で、県内のトップである。世帯数は５年前より 43 戸減って 224 戸であった。

村の掲示板には 2022 年３月末時点の村の人口、世帯数、本籍を置く世帯数が書かれていた。村の人口は 326 人、世帯数は 208 戸であり、2020 年国勢調査時と比べても、人口はさらに 20 人減、世帯数は 16 戸減となっている。ちなみに本籍を置く世帯数を表示する自治体は初めてだった。

島の人口のピークは戦後間もない 1950（昭和 25）年の 1，601 人で、世帯数は 316 戸であった。1972（昭和 47）年の沖縄県の本土復帰前後を中心に人口流出が顕著となり、人口減

に拍車がかかった。ピーク時と比較すると人口はおよそ 1/5 になったことになる。

役場ではだいぶ以前につくられた（2012 年版）村勢要覧をいただき、島の産業や小中学校の現状などについて聞き取り調査した。

観光協会の島の特産品売り場（左）、渡名喜村役場の建物（右）

渡名喜村漁協

渡名喜村役場に続いてから漁港の近くの渡名喜村漁協に行き、島の漁業の様子を聞く。事務所には男性３人、女性１人がいたが、そのうちの比較的若い男性が対応してくれた。

同漁協の組合員は正 55 人、准 14 人の合計 59 人である。職員はもう１人いるようで合計５人と多い。事業は購買、販売、製氷、冷凍冷蔵の各事業を営む。また、沖縄県信漁連から委託された信用事業の窓口もある。購買事業は漁具や釣り用の餌の扱いが中心で、石油類は扱っていない。

組合員が獲った水産物は荷捌き場の冷蔵庫に保管しておき、翌朝のフェリーに積み、那覇市泊にある県漁連の魚市場に搬入、一晩冷蔵庫に保管し、翌日の取引にかけられる。すなわち漁獲した後、取引にかけられるまで最短でも２日を要することになる。

2018 年漁業センサス時の漁業経営体数は 40 経営体で、このうち個人経営体が 39 であった。漁業就業者は男 46 人、女１人、合わせて 47 人である。正組合員数にほぼ近い。

島の在来の漁業は、石干見（いしひび）（サンゴ礁に石を積み上げ、干潮時に石垣内に残った魚介類を獲る漁法）、採貝、潜水、追い込みなどのイノーで営まれる漁業が中心であった。明治期に入り、座間味島でカツオの一本釣りが始まると、渡名喜島でも大きな漁船をつくり、集団的なカツオ漁が営まれることになった。鰹節の製造も行われていたようだ。しかしカツオ漁の競争が激化し、経営が厳しくなると南太平洋のミクロネシアなどにも出漁、あるいは出稼ぎに出た島民も多かった。しかし戦後、集団的なカツオ漁業は復活せず、沿岸域における小規模な漁業が営まれてきた。現在の漁船数は 75 隻であるが、このうち 74 隻が５トン未満船である。

現在のメインの漁業はジャンボ釣りと称する曳縄釣りと深海一本釣、カツオ一本釣である。曳縄釣りは主としてカツオを獲り、漁期は３～９月。漁船の両側と中央に３本の糸を流して釣る。深海一本釣りはアカジンやミーバイなどが対象で、漁期は 10～４月。両漁業の漁期はダブらないので双方を兼業する人も多い。カツオの一本釣りは３～10 月が漁期。漁協が設置したパヤオが３基あるが、この周辺でカツオをメインにマグロを釣る組合員もい

る。この他にトビイカ、アオリイカ、コウイカなどを対象とするイカ釣り、ヤコウガイやタカセガイの採貝、ヒトエグサ、モズクの採藻なども営まれている。

39 経営体のうち専業は６経営体のみで、１種兼業 11、２種兼業 22 で、兼業が圧倒的に多い。

沖縄県離島関係資料によると渡名喜島の水産業の生産額は 86 百万円で、村の総生産額の 4.8%を占める。１経営体あたりの単純平均水揚げ額は 200 万円ほどである。ちなみに最も多いのが建設業の 48.6%、農業はわずか 0.1%に過ぎない。つまり渡名喜島では、公共事業を中心とした建設業で島の経済が成り立っている。

漁協で話を聞いてからフェリーターミナル内にある食堂に行った。12 時にオープンするといっていたが、少し遅れていくと、すでに品切れで、弁当しかなかった。しかたなしに、豚カツ弁当を購入し、テラスで食べる。テラスでは４人連れの仕事で来たとおぼしきグループも食べていた。弁当に沖縄そばの小がついた。合わせて 500 円と安い。

渡名喜村漁協の事務所（左）、渡名喜漁港に停泊する漁船（右）

赤瓦とフクギの集落

昼食を終えてから、渡名喜島の集落を歩く。家々が碁盤の目のように整然と並ぶ。つまり自然発生的に形成されたものではなく、計画的に土地の配分が行われたにちがいない。おそらく沖縄特有の「風水」の思想によって計画されたものであろう。

各家の敷地は道路面よりも１mほど掘り下げられている。台風が多い渡名喜島では、強風が吹き抜ける。集落が形成されている砂洲の平地は２つの山の間に相当することから、ちょうど風の抜け道になり、まともに風を受けることになる。家全体を低くして、強風の影響をできるだけ低く抑えようとの配慮からだ。道路よりも敷地は一段低いから、雨水が溜まる恐れがあるが、砂州のためか、水はけは良いようだ。

沖縄の集落の伝統的なスタイルは次のようなものだ。

サンゴ石で塀を築き、その内側にフクギの木を植える。フクギも風よけの役割を果たす。家の屋根は伝統的な赤瓦で、家の門の正面には「ひんぷん」が配置される。そして屋根や門にはシーサーが置かれる。

渡名喜島の集落も基本的にはこの形態が踏襲されているが、道路を拡張した時にサンゴ石の塀を撤去し、ブロック塀に建て替えたところが多かったようで、サンゴ石の塀はあまり残っていない。また建屋も古い木造から鉄筋コンクリート造りに変わっているところが多

く、赤瓦の家も少ない。また、「ひんぷん」のある家も限られている。このように沖縄の伝統的な集落のスタイルは一部変質してはいるものの、フクギの並木がこれほど残っているところは渡名喜島以外では稀だろう。そして、各家には氏名の他に屋号が掲げられている。

フクギは古いもので樹齢 250 年を越えるから、集落の形成はそれ以前のことだと思われる。これほど長い期間、大きく変わらずに集落の原型をとどめているのはきわめて珍しいことである。

集落は東西 600m、南北 300mの範囲に形成され、「東」「西」「南」の３地区に分かれているが、明確な区分はない。集落はもともと後述する里御嶽のある東区から西方へ発展、さらに南側に拡大していったとされている。

この渡名喜島の集落は 2000（平成 12）年に「重要伝統的建造物群保全地区」の指定を受けている。沖縄県では竹富島に次いで２番目であった。

島の世帯数は上述したように、ピーク時には 300 戸を越えていたから、その数だけ人家はあった。現在は 200 戸ほどに減少しているので、1/3 の家は空き家になっている勘定だ。古い木造の家は朽ち果てているところもある。あるいはすでに取り壊されて更地になっているところもあった。沖縄には中国の影響で、「フール」という豚小屋が戦前まで各家にあったが、家屋が撤去された空き地にこの「フール」だけがコンクリートの原型をとどめている敷地も見られた。渡名喜島では各家で豚を飼っていた証である。

集落内には、井戸や雨水を貯めるタンクが置かれている家も見られる。渡名喜島は山地が多いわりに水源は乏しく、島民は天水と井戸水を併用していたからだ。後述するように 1986（昭和 61）年に海水淡水化装置ができるまで、島の水は安定していなかった。

人口の減少とともに島内の需要が少なくなり、島内にあった商店や食堂は次々の姿を消している。現在、小売店は又吉商店と桃原（とうばる）商店の２店だけになった。また昼食が食べられる店は、最近まで営業していたふくぎ食堂が４月１日で終了し、フェリーターミナルのターミナル食堂のみとなっている。

フットライト通りのフクギの並木（左）、道路より一段低い渡名喜島の家（右）

里御嶽

役場前から島の東側のあがり浜に至る集落を横断する道路はフットライト道路と呼ばれ、夜になるとライトが点灯し足元を照らす。渡名喜島の観光パンフレットによく取り上げられる道路だ。この道路を東に進み、ふくぎ食堂の前を通り、桃原商店でペットボトルのお茶

を買い、カイヤ跡の角を右折して里御嶽に向かう。

琉球王朝時代、渡名喜島は久米代官の管轄下に置かれていた。カイヤ跡は首里王府から穀物の検収のために派遣されていた役人が仮宿にしていた屋敷跡で、個人の所有地であったが、現在は村に寄贈され、史跡としてそのまま保存されている。

集落と山の間の平坦な土地は畑になっている。急な坂を登っていくと上ノ展望台があった。砂洲に形成された集落全体が見渡され、小中学校、漁港の先に入砂島が浮ぶ。東側にはサンゴ礁のコバルトブルーの海が拡がり、弓なりをした長い砂浜が続く。

ここからさらに登ると、里御嶽があった。御嶽というとこんもりとした森の中にあるイメージだが、ここは周囲にビローなどの木が繁るものの、森というイメージではない。御嶽の周りの地面はコンクリートが打たれ、明るい雰囲気である。そして神社のような造りのコンクリート製の社が建つ。

御嶽からさらに北に進むと、14～15 世紀ごろのグスク時代の遺跡が見つかった平地があった。この遺跡からはグスク系の土器、輸入陶磁器、鉄釘、鉄釜、古銭などが出土している。

もともと渡名喜島の集落はこの御嶽を中心とした丘陵地（里）にあり、その後、現在の集落を形成していったといわれているが、その年代ははっきりしない。

里御嶽（左）、グスク時代の遺跡の発見場所（右）

地割制度と農業

渡名喜島の農地は集落の南北の外側にあり、山裾との間に形成されている。山側は後述するように段々畑が造成され、山の中腹まで連なっていたが、現在は木々に覆われ、跡形もなくなっている。

琉球王朝時代、沖縄では土地の個人所有を基本的に認めておらず、土地を地域で総有する「地割制度」であった。この制度は琉球処分後も残り、明治政府が 1903（明治 36）年の沖縄県土地整理法が施行し、総有地から個人所有に変えるまで続いた。しかし、渡名喜島の場合は施行後も長いこと「地割制度」が残り、1987（昭和 62）年度から始まった農地改良事業によってようやくその姿を消している。地割制度が残っていた時代は、短冊形に細長く区分された農地が集落の南北に広がっていた。なお、渡名喜島と同じように「地割制度」に固執していた久高島では今でも残っており、「久高島土地憲章」として成文化している。

かつて渡名喜島は米、麦、粟、サツマイモをつくり、食料を自給していた。しかし島の人口が増えると、集落背後の「地割制」の農地だけでは不足してきたため、1887（明治 20）年

ごろから山の木を焼き払って段々畑を造成している。なお、しばしば飢饉に見舞われているが、その時はソテツの実で飢えをしのいだらしい。

高度経済成長を経て貨幣経済化が進むと、穀類は島でつくらずに買うようになり、農業は廃れた。不便な山の段々畑は最初に放棄され、今ではその跡を確認することができないほどに元の自然の山に戻っている。

現在、島に残る農地は畑のみ 380 a で、10 経営体の農家によって農業が営まれている。これらの畑では主に島ニンジンとモチキビが植えられ、島の特産品となっている。島ニンジンの収穫は 12 月から２月で、収穫が終わるとモチキビの種を蒔き、９月に収穫し、再び島ニンジンを蒔くというサイクルのようだ。渡名喜島の農地は砂地なので、島ニンジンは 50 ㎝ほどの長さに伸びるらしい。

ただ、農作物の販売収入は全体で 1,000 万円ほどと少ない。

山と集落の間にある農地（左）、土地区画整理事業で整備された農地（右）

あがり浜の軽石

里御嶽から坂を下り、再び集落に入って樹齢 200 年を超えるというフクギの木を見る。古木の根元は太いが上部は短く切り詰めているから、樹高はそれほど高くない。

近くに「ニシバラドゥン」と呼ぶ御嶽があった。御嶽の前はコンクリートが張られた広場になっている。渡名喜島にはシマノーシ（島直し）という祭祀が隔年に実施されているが、上述した里御嶽、「ニシバラドゥン」、そして島内に２つある別の御嶽を含めて、４日間にわたって執り行われるそうだ。

集落をさらに東に向かうと海に出た。あがり浜だ。沖縄では東のことをアガリというから「東の浜」という意味になる。

浜では８～９人の人が出て、海浜清掃を行っていた。「離島漁業再生支援交付金」を活用した活動なのかと思い、活動している人に聞くと、環境省の事業で、軽石を回収しているのだという。よくみると、確かに軽石が帯状に漂着していた。福徳岡ノ場の海底火山が 2021 年８月 13 日に噴火している。この時に発生した軽石が約８ヶ月かかつてはるばる 1,000 ㎞以上も離れた沖縄までやってきたのだから驚異的だ。砂浜の上の軽石をレーキで集め、バケツで運んでいた。機械で砂と軽石を分けて回収するのは難しいから人力に頼らざるを得ないのだろう。

アガリ浜は約 700ｍに渡って続く美しいビーチである。もうそろそろ海水浴客が来るはず

なので、その前にきれいにしておこうとの配慮なのだろう。

このビーチでは、村民や村出身者、郷有会、前在職員などが参加する盛大な水上運動会が恒例となっているようだ。2018（平成 30）年 11 月に開かれた第 100 回水上運動会を記念した石碑が置かれていた。その後は新型コロナ騒ぎで開催されなかったと思われる。記念碑をわざわざ残しているのは、島の人口減少と高齢化によってもはや伝統的な水上運動会の開催が難しくなってきていることを示しているのか、あるいは伝統的なイベントを現役の人々に続けてほしいと願っているものなのか、のどちらかであろう。

島東部のあがり浜海岸（左）、海底火山の軽石を回収する島の人々（右）

島の南側を周回

浜で清掃活動をしていた人に、島の南側を一周したらどのくらい時間がかかるかと聞いたところ１時間以上だという。帰りのフェリーに何とか間に合いそうなので、思い切って歩くことにした。「ハブが多いので注意するように」と忠告を受ける。

アガリ浜を過ぎると、アマンジャキと呼ばれる場所を通る。海が断崖絶壁まで迫り、満潮時には海岸沿いを歩くことができなくなるため、昔の人が崖の際に細い道をつくったところだ。この道は石を積み上げただけのものなので、海が荒れる度に壊れ、定期的に島民が修繕にあたったようである。もちろん現在は舗装されている。

ここを過ぎると、再び砂浜になった。砂地には多数の鉄筋棒が刺してあり、どうやらヒトエグサの養殖が行われていたと思われる。2018 年の漁業センサスでは、１経営体が藻類養殖をしており、おそらくここでヒトエグサの養殖をしていたのだろう。しかし施設は十分手入れをしているとは思えないので、すでにやめてしまったようだ。

ここから先は海を離れて内陸部に入り、坂道になった。道路はきれいに舗装されている。坂の途中に「島尻毛」という散策道が整備されていたが、時間の関係もありこちらには行かなかった。

やがて標高の最も高いところを通過して下り坂になる。ところが途中で小雨が降り始めた。

坂を下る途中の道路脇に広い駐車場があった。そこから階段を登ったところに大本田展望台がある。天気が良ければ、久米島、慶良間諸島、粟国島など 360 度を眺望できるはずなのだが、あいにくのどんよりとした空模様のため、近くの入砂島しか見えなかった。この島は現在無人島であるが、島に拝所があることからかつて人が住んでいた可能性があるとい

われている。また戦前の一時期、渡名喜島の出づくり地であったようだ。戦後は米軍に接収され、射爆場として利用されてきた。

ここから先は一気の下り坂になる。予想外に時間を要したため急いで歩いた。

やがてユブク浜に出た。ところが、道路標識をみると、ここから港まで２㎞と書いてある。徒歩では 30 分を要するだろうから、フェリーにはぎりぎり間に合いそうだが、相当体力を消耗していたから、きつい帰り道になると観念した。

そこへ軽自動車が通りかかった。ここはヒッチハイクをして港まで乗せてもらおうととっさに判断して手を挙げると車が止まった。おそらく車の主もフェリーの時間を知っていて、ここから歩いたのでは大変だろうと同情してくれたのだろう。大変助かった。車の主は最近になって漁業を始めたといっていたので、役場かどこかに勤めていて、定年後、漁師になったに違いない。

車はさすがに早い。５分ほどでフェリー乗り場に着いた。出発の 30 分ほど前だった。

ヒトエグサの養殖場跡（左）、大本田展望台から入砂島を望む（右）

小中学校

ヒッチハイクのおかげで、少し時間ができたので、港の周辺を歩く。港の北側に、幼稚園を併設した村立渡名喜小中学校がある。校庭は広い。役場での取材によると、現在の在籍者は、幼稚園４人、小学校 11 人、中学校８人である。人口は減ってはいるものの子供はそれなりにいるので、当面、小中学校は維持される見通しであるが、人口減少と高齢化の波は止まらないので、厳しい状況が続くだろう。幸い、渡名喜村立であり、近くの島との間は遠く離れているから、他の島の小中学校と統合される心配はないから１人でも児童・生徒がいる限りは存続するだろう。何とか島の学校は残って欲しいものだと思う。

小中学校の北側に、沖縄電力の火力発電所と海水淡水化プラントが併設されるように並んでいた。

淡水化プラントは 1986 年に竣工したもので、沖から取水した海水を逆浸透膜方式により淡水化、その造水能力は１日 300m^3 である。井戸や雨水に依存していた不便な水事業から村民は開放された。生活廃水は農業集落排水整備事業で整備された汚水処理場で処理されている。

一方、村の電気事業は 1962 年から村営によってスタートした。当初は電気が使える時間帯は限定されていた。その後、1971 年に沖縄電力に移管され、1976 年に現在の発電所が落

成している。かくして渡名喜島の生活インフラは 1980 年代までには整っていたことになる。

小中学校の東側の旧幼稚園、旧小学校の跡地は多目的広場になっている。広場の奥に「平和の塔」と書かれた慰霊碑が置かれていた。渡名喜村戦没者名簿と書かれ、1785 年から 2007 年まで合計 290 名の名前が刻まれていた。ただしいつの戦争のことなのかわからない。兎に角、戦争で亡くなったすべての島民の名前を記したのだろうか。

集落内の道を南北方向に歩く。民宿ムラナカの前を通り、渡名喜郵便局を見て、旅客ターミナルに戻った。観光協会をのぞき、島の特産品の「キビ餅入りのちんすうこう」を購入した。渡名喜島の船客ターミナルは赤瓦の伝統的デザインである。すでにフェリーに乗り込む乗客が列をつくっていた。

渡名喜村立幼・小・中学校の校舎と広い校庭（左）、旧小学校の多目的広場に設置された平和の塔（右）

フェリーは例のエンジントラブルが影響したのか、久米島から少し遅れて到着した。とりあえず、フェリーが欠航にならず、助かった。フェリーには 30 人ほどが乗り込んだ。泊港まで約２時間を要し、17 時 40 分に着いた。スマイルホテルに預けておいた荷物を受け取り、那覇空港へ向かう。

【文献】

中俣　均（2014）：渡名喜島、地割制と歴史的集落景観の保全、古今書院. Pp. 164.

渡名喜村（1983）：渡名喜村史. 下巻.